

# 新緑大和紀行

野 口 明

カット  
(筆者)



五月六日 雨

昨夜東京を後にした急行大和は、名古屋から左折して、伊賀路の新緑を進む。一月前に九州の旅で見た水々しい新緑に再会する思いである。

午前八時過ぎに奈良着、松尾、雨倉両君に迎えられて、一路東大寺境内の松尾君の家に旅装を解く。

四年前に来た時は、氏は副知事として公園脇の官舎に居たが、県政に知事と意見を異にし、潔く官を退いた硬骨の士である。爾来京大寺焼門内に小寓を得て、閉日月を楽しんでいる。

小憩後、雨も趣あるべしと、下検分を兼ねて外に出る。先ず博物館に入る。丁度平安初期展と云う特別陳列に当って居たが、こういう催はエトランゼーには有難くない。常に天平を主にした系統的品列に接しようようにして欲しい。

公園を逍遙してから型の如く春日神社に歩を向ける。参道の両側に並ぶ石燈籠は、其の数千数百と聞く。大小種々の形式があるが、大体六種乃至十種位に分類

出来る由、必ずしも所謂春日形が多いとは限らない。奉獻の年号を見ると、江戸中期のものが多し。私は種々の形をスケッチしたが、何時も感ずる如く、石燈籠の均勢美は極めて微妙で、之位描ぎにくいものはない。

楼門を入ると、拝殿の役をしている弊殿があって、その先は林檎の庭から斜に石段を設けて、中門と廻廊となり、本殿はその中心にかくれている。五十円納めると中門から本殿を拝することが許される。本殿は意外に小さい建築で、四棟並んでいるのが春日の特色である。丁度結婚式があって、白い洋装の花嫁を中心に、林檎の庭で記念撮影をしていた。林檎の庭には林檎の樹が一株あるが、今のは何代目かの稚樹の由である。林檎が果して古くから日本に在ったものか、或は今の林檎とは異種であるか、私は今詮索する暇を持たぬが、臨御の庭の転化とする説もあるようである。

内外の廻廊には金属製の釣燈籠が賑かに釣り並べてある。火袋に透刻された年

月や奉獻者の氏名を見ると石燈籠同様、江戸時代のものが多い。

本殿の裏には七種の樹の同棲する珍木寄生木がある。それを見て西の門を出ると素木造りの閑雅素朴な酒殿と饗殿がある。

宝物殿を見て、普通の順路を若草山の裾から、手向山八幡を経て、二月堂、三月堂と東大寺の境内に入り、バスで市内に行き、専門店を探して画の材料を補充して帰った。

#### 五月七日 雨

雨仕度をして、二月堂に行き、湯屋を写生する。二月堂に隣る古風な茶店で煎餅を喫して、三月堂を拝観する。此処は天平仏の王国で、本尊不空羼索観音をめぐって、日光月光以下教基の仏像が森厳な気分を作っている。裏手の閑寂な中庭が気に入ったので写生箱を開いて描く。

帰路、二月堂の下から大仏殿の裏手へ行く途中で、山の方を振り返って小品を写生する。

註（今度の旅は、美術の観賞や勉強よりも絵を描くことに重点を置いた。従って一作に二時間乃至三時間を要し、その外鉛筆のスケッチもしたくなるので自然日程を緩にせざるを得なかったのである。文中、写生とあるは油絵の写生、スケッチとあるは鉛筆スケッチの意味である。）

#### 五月八日 快晴

朝食前に近くの戒壇院の境内を通り抜けて数葉のスケッチを得る。

松尾夫人に教えられ、藤の多いと云う春日野の東南部の所謂「ささやきの谷」に行く。馬酔木や雑木に藤がまつわり、その下を細流が潺湲と流れる場所である。藤は残花を少量とどめるのみなのは、例年に比して花が早やかだったためか、盛りは一年置きで生憎少い年のためとか聞いた。

藤を断念して、細流を越えて高畑の町に上る。昔は破れ築地が奈良独特の画趣を湛えて洋画家を喜ばした地であった

が、今は新しい家が殖え、糜爛的風景は殆ど見られない。

高畑の町外れに新薬師寺がある。有名な十二神将の塑像を拝観したが、往年程感激しなかったのはどう云うわけであろうか。

境内に会津八一氏の「ちかづきてあふぎみれどもみほとけのみそなはずともあらぬさびしさ」の歌碑がある。傑作の名高かった此寺の香薬師仏を詠んだものであるが、惜しむらくは昭和十八年に盗難に会って今に帰りまさぬのである。

ついでに記すが此の老歌人の奈良との因縁は浅からず、不思議に詩歌の碑の少い此の地に、氏の碑のみは三基もある。即ち東大寺に「おほらかにもろてのゆびをひらかせておほみほとけはあまたらしたり」があり、又春日野に「かすがのにおしてつきのほがらかにあきのゆふべとなりけるかも」があった。然し後者はあまりに好事家が拓本をとるからとて、近頃春日神社々務所に移されて、其の拓本は三百円で希望者に頒つ仕組みに

なっている。私は当初そんなことも知らずに徒勞に搜索をしたのであった。氏の歌集はかの和辻哲郎氏の名著「古寺巡礼」と共に奈良芸術への啓蒙的役割を果たした。人のよく知る処、一卷の歌集又偉なる哉と云いたい。

古寺巡礼の影響も大きい。此の書出で以來、奈良の古美術鑑賞に一つの型が作られたようにさえ感ずる。それは空想連想を縦横に駆使して、衍大誇張の讃辭を綴る主情主義である。私はそうした行方が実感を遊離し、美の標準を却って曖昧ならしめることを恐れる。昔洋画家津田青楓氏が、某美術雜誌に、法隆寺の壁面の価値に疑を持つと、大胆に告白した記事を今に忘れない。私自身は青楓氏と所感を異にするが、こうした良心的言説は尊重したい。

大分余談にわたったが、私は新薬師寺から春日の森に入って行った。前に見落した若宮を詣りて本社に到り、楼門内の名花「砂摺りの藤」と、もう一枚宝庫と七種の寄生木とを入れた図とを写生す

る。場所柄修学旅行の生徒達が引きなりに来て聊か辟易する。彼等の様子を見てみると、中には先生や案内人の説明を殆ど聞かず、見るべき物も見ず、ただ漫然と遊びに来たように見える者も少くない。私は今度九州と大和と、随分修学旅行の実体を目撃して、多少批評の種を得たようである。兎に角日本程修学旅行の盛んな国は世界何処にも類が無いであろう。

帰途、飛火野に廻って斜陽の中の鹿を写生する。因に飛火野とは奈良時代に通報用の烽火を上げた地黒の由、烽火を飛火と云う大和言葉は面白い。

#### 五月九日 雨

傘をさして、観光客の行かない奈良の南都の古い町を歩いて見る。それには昔興福寺と肩を並べた大刹、元興寺の跡を見る目標もあったからである。やっと探し当てた廢址は、今は町中の狭い庭に過ぎず、僅かに塔の礎石のみが土壇の上に並んでいる。訪う人とてもなく、繁った

草に春雨蕭々たる情景は淡い哀情を咬らずには措かない。次に極楽院の金堂に行ったが修理中でよく見られなかった。猿沢池に出て、雨に煙る興福寺の五重塔を描きたかったが、雨を避ける場所が無いので断念する。

興福寺の五重塔は近年登攀を許すので私も登る。下から仰ぐとそうでもないが、登って見ると太い木材で堅固に組上げた塔は、建築中最も強固な耐久力を持つように思われる。千年以上前にこうした技術のあったことは驚異に値する。私は最上層の階廊に坐して、煙雨の眺望を二枚写生する。北側だったので寒い風に慄えたが、緊張した故か幸に風邪にも冒されなかった。夕方になったので下る途中、米国の夫人連三人が賑やかに登って来るのに会う。上に居た守衛は又明日も来てはと云ってくれるのに、下の管理人からは半日も居るとは非常識である、拝観者の邪魔をしたと大に油をしばられて苦笑した。

五月十日 快晴

素晴らしい快晴に心も浮きたって、近鉄で西の京に下車する。薬師寺は駅からすぐである。約四十年の昔、高等学校の生徒の時に一友に案内されて古美術觀賞の開眼をした私にとっては記念すべき寺である。その頃は那山まで汽車で来るより仕方がなかった。また古美術趣味の普及しない時であったから、境内は我々の外に人影とてもなく、閑寂を極めて居た。友人が当時の新刊書、黒田鷗心氏の日本美術史講話を持参し、現場でそれと首引きに勉強したのである。其の本は簡潔で穩健で、好適の啓蒙書であった。最近又新版が出たようであるが、今以て寿命を保つのは嬉しい。

私は其の後二度程来たように思う。仏像は詳知しているので格子の隙間から覗いただけで東側の部落に行つて、農家の間に三重塔を見る図を写生する。終つて更にもう一度境内に戻つて塔を真正面から写生する。金堂は近年塗り換えた様子だが、その朱色の単俗な色調は私には不

快である。

次に北数町に在る唐招提寺へ行く。此処も四十年前の思出の地である。初めは薬師寺の方が深い興味を与えてくれたが爾後の歴訪は反対に此の寺の森嚴な男性的な雰囲気をおぼやうになつた。法隆寺に次いで襟を正さしめる名刹だと思ふ。今日は先ず拝観してから鼓樓を写生したが、晩春の斜陽は美しい色調を現じていた。

五月十一日 快晴

朝食前に木津川街道を北行して見る。

東大寺転害門は初めて見るが珍しく豪放な門である。癩者を収容したと云う北山十八間長屋は、社寺の多い奈良の名勝の中に在つて、珍とする社会施設の遺物である。近年修理成つて余りに整備され、又柵を作つて内部を見られぬようになつてある。坂を登ると般若寺があるが、有名な十三重の六石塔と、荒廢した樓門の外見るべきものはなく、此の名刹の末路の衰れさは心を傷めしめずには措かない。

食後バスで法隆寺に向う。途中予定を変更して小泉口で下車して法起寺から見ることにする。聖徳太子の別荘岡本宮の旧蹟に建てられた寺で、今は素朴な、然し堅固な三重塔が樹林の上に聳えている。蛙鳴く畦道を辿つて寺域に入り、更に裏の岡本の部落の丘から写生した。雲一黒無い快晴の空の下、遠く霞む葛城山脈を背景にした眺めは、五月の大和路の旅情にふさわしいものであった。

法隆寺まで半里程の道を歩む。斑鳩の里に入ると、大和棟の典型的な農家の集落に豊かな面趣を感じる。然し時間の關係で之を割愛し、法隆寺を拝観する。

法隆寺は流石に堂々たる天下第一の名刹である。多くの脇寺を擁した宏壯な規模、均勢のよくとれた堂塔の建築、量質兼備した貫祿は十分である。五重塔は最近修理終つて多年の工事困いを解いたが、今は金堂が代つてその中に鑿の音が籠めている。修学旅行団のいくつかが、弁当を開き、土産物を求め、又拝観しているが、幼稚園の遠足が来ているのには

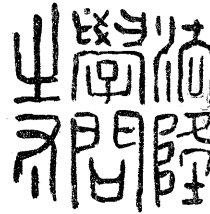
鶴寺倉印



鶴寺金堂



法隆寺閻摩



法隆寺印



驚いた。まるで彼岸会のような賑いである。中門内は撮影も写生も許可なくしては禁ぜられているのは諒解出来る。止むなく廻廊の外、向って左方の樹林中から比較的塔の見える地点を見つけて写生する。

(法隆寺の印の中、鶴は「いかるが」と読む)

(筆者画)

宝庫を拝観して久振りに金堂の本尊、薬師如来や名物の玉蟲厨子の前に立つ。夫等は昔受けた印象よりも遙かに立派に感ぜられた。夢殿を拝観した時は已に閉門直前であって、斜陽が流れていたが、昔見た程ロマンチックな気分がなく、何となく乾燥した空気を感ずる。写生も出来ず、簡単なスケッチに止めたのはいささか残念であった。中宮寺も訪ねたかったが、黄昏が迫った為め止めて、国道に出てバスに乗る。

奈良に近づいた頃、大日輪が生駒山に沈む壮観を見る。大和平野は燦爛たる光彩を一杯に湛えている。遠い昔、平城京の人々も同じ光景を見たことであろう。其の壮嚴の中に仏教の神秘を思いはしなかったか、天平芸術のモチーフはこう云う処にもありはしなかったか、などと楽しい想像に耽った。

五月十二日 快晴

バスで多武峰を志す。桜井で乗り換えて谷に入って山下に到る。登り数丁、一汗掻いて談山神社を拝する。想像していたより小規模な社殿である。然し鮮かな新緑と、之に浮かぶ燃えるような朱色の廻廊は絶好な画題である。社人の説明によると、日光の東照宮芸術は、三代将軍が此処に参詣してヒントを得たので、関西の日光の称もあるそうである。拝観してから新緑と廻廊の図を写生する。

有名な名物十三重塔は錦の大座布団を積み重ねたような豪華なもので、写生したいと苦心したが梢に遮られて足場を得られないのに怨を呑む。

名残惜しくも下山し、再び桜井まで戻り、近鉄で室生口に着く。バスで室生川の谿谷を行くと、山藤は丁度見頃である。「くたびれて宿借る頃や藤の花」此の句は芭蕉が大和路での作なることを思うと、一層感銘の深きを覚える。室生に着くとすでに暮色が催していたが、名物の五重塔を写生する。小さいが美しいこ

とで有名な塔である。

寺の前は溪流で、朱塗りの橋が美しい。その袂の副業的の小さい橋本という田舎宿に泊る。然し夕食の膳は、鰻、数々の山菜、高野豆腐等で実に結構であった。夜は又涼々たる水声、月光に麗な山と寺、一黒の灯影、詩のような一夜を樂しむことが出来た。

#### 五月十三日 晴

早起して宿の障子を明けて、朝日に映えた若葉に埋まる室生寺を写生する。朝食後拝観を求め、金堂、灌頂堂、五重塔、と説明を聞く。建築の彩色も適度に剥落してそれが新緑に映じて実に美しい。女人高野と云われる丈けあって、他の寺と違った繊細と華麗とがある。私は半日をゆっくりスケッチに暮した。

午後は長谷寺に詣でる。三十年前に一木宮相に随行して県庁の自動車で来て寺坊で饗応されたことがあった。今や一介の老書生となって、リュックサックを背にしてトポトボと来ると、全く別地に来

た思いがする。旅の醍醐味は心傲らざる心境に宿るようである。

長谷寺は寺坊多く仲々繁栄している。有名な廻廊は電光形に緩傾斜を画き、両側には名物の牡丹が多い。然し時すでに遅く、僅少の残花もあるが花は平凡である。長い廻廊が尽きると豪壮な本堂が、広い谷を前に舞台を掲げている。前山は老樹多い潤葉樹林、折からの午後の光を受けて新緑燃える如く強烈である。躊躇なく舞台と新緑とを写生する。

帰途、乗り換を利用して、草臥れた足を励まして、西大寺を見る。昔の名刹も荒廢して、東大寺の隆昌に比すると同情あるのみである。

#### 五月十四日 雨

午前は休養して訪客に会い、午後は雨の中を正倉院に行く。旧友和田所長に挨拶し、所員中山氏の案内で、鉄筋コンクリートの新倉庫を見る。近代建築学の權威を集めて最近完成した金庫のような大倉庫である。今は湿度、温度の試験時代

で、数年間のレコードを検した上、御物の移動を断行する由、流石に慎重な方針である。過去半年間の試験成績は良好とのことであるが、内部の檜材に節の多いのを見て、私は御料材ありしならばと一抹の口惜しさを覚えた。然し此の倉庫は恐らく世界第一完璧なものであろう。

辞して佐保路の法蓮町の民家を見る。奈良特有の太い格子造りの家屋は、市中にも散見するが、此の一劃のみは軒を並べて、直線の美を現出した街景を作っている。

夜は雨宮君に招かれて、松尾君夫妻と共に、水炊きを御馳走になった。

#### 五月十五日 晴

朝食前に東大寺の南大門の仁王をスケッチする。仁王像は全国到る処に見るが、仲々佳作に会わない。此の仁王は二丈六尺の巨像で、量感も十分、デッサンも快適、作者運慶湛慶の偉大さを裏書する本邦第一の傑作である。

落合学長に迎えられて女子大に同行さ

れる。家政学部長波多腰女史にも会い、近年完成した家政学部の新校舎を見る。

午には奈良ホテルに案内されて、二十年振りでは此処の洋食を御馳走になった。

帰路落合氏の案内で白毫寺に行ったが、草は荒れ堂は寂れ、頽廢の状見るに忍びない。然し附近の白毫寺部落は奈良のフランスと云う人もあるとかで、黄土の壁の家が適度に撒かれて、牧歌的の田園に接している。

新薬師を再訪して、先日見落とした鬼瓦をスケッチする。かつて仙台で、土地の瓦の名工が大和を巡り、此処の鬼瓦に隨喜の涙を流したという話を思出したからである。

十輪院を見る。修理中で、上屋で覆われて詳見出来なかったが、本尊である巨大な石甍の中の地藏菩薩を珍しいと思つた。

学長と分れてから、電車で西の京へ行って見る。薬師寺の東の街道から、奈良の街、高円、三笠の連山の暮色を写生した。

五月十六日 曇

朝食前に猿沢池で興福寺の塔を写生する。朝六時と云うに、前夜泊った修学旅行の生徒が沢山来ている。七時頃には隊伍を整えたり、記念撮影をする者の動きも始まる。一刻を惜む気持はよく判る。

食後、落合学長の私邸に答礼し、近くの尼寺興福院を見る。建築はさして古くはないが清掃行届いた静閑さは氣持よい。一体に尼寺は、中宮寺、法華寺に見る如く、管理がいいようである。

此の近くに住む、お茶の水大学の先輩、越智老女史を訪ねる。少時話してから其案内で、在原業平の宅趾と云う不退寺を見る。

女史と分れて独り海竜王子に行く。相当の建物と、相当の仏像とを持ち乍ら、長く専任任職を欠いたとかで荒廢は甚しい。作務をしていた現任職からいろいろ説明を聞く。寺の將來について、彼に計画と希望のあるのは頼母しい。然し荒廢は多くの場合画趣となる如く、スケッチ

の材料は甚だ多かった。隣りの法華寺は修理中でもあり、時間も乏しかったので素通りする。本尊十一面観音は私の最も好きな観音であるが、比較的よく記憶しているのが割愛したのである。

此のあたり所謂法華寺の部落は白毫寺や法隆寺の部落と共に大和農村らしい情趣に富んでいる。其処を過ぎると、平城宮趾にかかる。南面の緩傾斜地、南に葛城、西に生駒、東に三笠の山々を見て、宮殿にふさわしい景勝の地である。大正末年に梶の上田技師の案内で、一木宮相に隨行したことを想出して、今は古人となった両氏のことがかくしく回想された。

此の辺は御陵も多く、里人に道を尋ねても「成務さんの御陵の脇を」等と、親しみの言葉を使うのも興味しい。その成務帝陵を拜して丘を下ると秋篠の里は眼前に見える。然し競馬場と競輪場と隣合つて出来ていて、風流な秋篠の里に異変を起した恰好である。

秋篠に着いた時には五時に近かったら

う。幸に開扉中だったので拝観を乞う。私は宿願がなつてかつて書齋に写真掲げていた程好きな伎芸天の前に立ったのである。薄暗い室内であり、像も意外に黒味を帯びているので、面貌も容易に明識出来ない。やがて幾分よく見えるようになったと思つたら、他の扉まで開かれたのである。「何時までも御ゆっくり」と退出を促さない好意を感謝しつつ、私は十分に拝観し得て、夕暮の路を西大寺に出て帰つた。

#### 五月十七日 曇

思い切つて当麻を志す。近鉄で櫃原神宮駅に到り、阿倍野線に乗換えて、当麻駅に下りる。前面に二上山つづきの柔かい山脈が横たわつて、麓に塔が二基それと認められ、道は真直に寺に向つて伸びている。やや行くと道の右側に大きな五輪の石塔のあるのは、土地の人当麻(け)速(は)の供養碑である。寺に近づくと古風の建築の家も混じつてくる。交通やや不便の為めか、平時はあまり混むことなく、大

和風物の情緒が比較的豊かに残つてゐる。

境内は、堂塔賑やかに、殊に今日二塔を完全にとどめる唯一の寺として貴重な寺である。中央正面の曼陀羅堂は中将姫伝説の所謂蓮糸曼陀羅を本尊とし、鎌倉期の建物であるが、割に古色がある。内陣を拝観したが、大厨子には模写の大曼陀羅が掛けられてある。面白いのは、弘法大師がいろは四十八文字を創作した室とが、中将姫が曼陀羅を織つた室とががあることである。姫二十九才の像なるものがあるが、その美貌は生気があり、仲々魅力があつた。

境内をスケッチし、最後に塔頭「中之坊」の上に東塔の聳える景を写生する。中之坊は数ある塔頭中の筆頭格のもので、書院、茶室、庭園が重要文化財になつてゐる。私も拝観したが、石州流の庭園は小さいが美しいものであつた。五時辞して帰路につき、途中奈良に近い尼ヶ辻の駅に下車して喜光寺遠望の暮景を写生した。

#### 五月十八日 晴

朝、よい靄であつたから、猿沢の池に行つて、先日の作品を修正する。

午前は最後にと取つて置いた大仏殿を写生すべく、場所を物色した結果、鐘楼から廻廊の方へ下る石段の途中に定める。両側の新緑の間から見る大仏殿の側面の木組が特に面白いと思つた。

終つて大仏を拝観すべく門を入る。正面から見る大仏殿の堂々たる偉容は全く雄大である。木造建築としては恐らく世界最大ではなからうか、然し創建当時のものは間口に於て約五割大きかつたと云うから、其の著想の雄渾さには驚かざるを得ない。私は今迄は、之を粗大の凡建築と思つていたが、今度全く認識を改めた。東大寺の大仏、大仏殿、仁王、鐘楼、転書門等と考えると、天平精神の気宇は日本人離れをした雄大なものであつたかに想像される。

午後、大阪の伯父の家に行つて一泊した。



五月十九日 曇

午過ぎに大阪から帰って、最後にもう一度、春日神社から普通のコースを一巡し、補足的にスケッチする。万葉植物園も始めて見たが、高級過ぎるためか、入場者は稀のようである。奈良公園は半被姿の天理教の人達が数百人清掃奉仕をしていた。

かくて其の夜、私は名残惜しくも奈良を去った。駅には世話になつた松尾君夫妻、令嬢、雨倉君夫妻、女子大の松沢君等が見送ってくれた。

願れば約二週間、日光のある間は、昼飯の時間も惜しむ位に、大和の風物を前にして過した。吉野路、飛鳥路等は逸したが、何れも曾遊の地であるから、ほぼ私の大和の情は今度で集大成されたように思う。私は松尾君等の好意を感謝しつつ、遠ざかり行く奈良に別れを惜しんだのであった。

(元お茶の水女子大学長)

× × ×  
× × ×  
× × ×

36頁より続く いろいろかえを作ること

は、このように簡単なのでありますが、それだけにいい作品を作るということ、製作する心がかえが、重大だと、考えるのであります。これは良心の問題であります。透視紙芝居を新しく考案した者として、今の峻しい時代の波に流されつつある子供達のために、真剣に考えてやらなければならぬ義務だとも思つて居ります。

私は商業主義をいちがいには悪いとは思いませんが、童画家として、又世の中の多くの親の一人として、せめて自分で考案したるかげえ透視紙芝居だけは、企業化することなくして、子供達のために美しい夢を与えるものとして守り続けたと思います。それには数多くの作品を自分達の手で作るといふことが必要であります。

そのために私は同志を集めて、かみきりむしの会を結成したのです。

これは微力な一粒の種にしか過ぎませ

んが、これを機縁として子供達のためにという善意の人達が手をつなぎ合う母胎ともなれば、私はこの上もない喜びだと思ひます。

こども達のために、力を合せて夢を作る大きな組織にまで発展したらと、考えただけでも嬉しいことでもあります。

又そのような人達の集りの中からも、表現の技術の巧拙を乗り越えて、大人と子供の区別なく本心に心うつ童画としての、透視紙芝居が生れてくると私は信じて居ります。

一人でも多くの方が、こどもたちのためにかみきりむしの仲間に加つて下さることを願つて居ります。

やがて私達の仲間が、一人前のかみきりむしとして成長し、日本中をこびまわり子供たちのよき友となる日の来るのを待つて居ります。

(童画家)